

ビッグニュース 語学の天才的落ちこぼれ（大学の同級生、埼玉大学勤務時代同僚の評）が人生最初で最後に褒められた！「叙述は章立てごとに緻密で淀みない。」「訳文は、原文に忠実で、セガンの記述を日本語で読み取ることができる。残念ながらこれまでのセガン翻訳本にはなかったこと。」

私の2010年著書、2014年著書の2冊が、全国障害者問題研究会機関誌『障害者問題研究』2016年2月号（第43巻第4号）で、書評されております。評者は世界的なセガン研究者でセガン方式で教育・福祉の事業に携わっておられた藤井力夫氏です。私の研究者の土台を培った戦前生活綴方教育研究にも書評は及んでおります。以下、ご紹介します。お読みください。 2016年2月25日 川口幸宏

書評

川口幸宏著

『知的障害教育の開拓者セガン—孤立から社会化への探究』新日本出版社 2010年

『一九世紀フランスにおける教育のための戦い—セガン、パリ・コムニオン』幻戯書房 2014年

評者 藤井力夫¹

戦後でみても、私たちの先人は、「この子らを世の光に」（糸賀一雄）とか、「道は遠けれど」（近藤益雄）、あるいは「胸ふつつつ」（青木達雄）、「逆風に帆をあげて」（与謝の海養護学校）と謳ってきた。本当のところを実現するためにこころの内から滲み出た戦いのうた、そう解することができる。誰もが落ちこぼれなくということを追求するほどに、形式的に済まそうとする壁に突き当たる。どう覚悟を決めるべきか悩んでいる人も多いことと思う。ここに紹介する二著作は、こうした悩みを、近代市民社会の成立時に立ち戻って考えることができるという機会を提供してくれる。戦前日本における生活綴方教育運動の発掘調査研究に携わってきた著者だからできた第一級の研究である。日本でのそれを、近代公教育の発祥の地、フランスで実施し、パリ・コムニオン下での世俗性教育に向けての戦いや、知的障害児教育の開拓者、オネジム＝エデュアル・セガン（Onésime-Édouard Séguin, 1812-1880）の苦闘を浮き彫りにしたのであった。2012年10月、フランス・クラムシーで開催されたセガン生誕200年シンポジウムを鑑みても、著者における研究の到達段階は、最先端を行くものと推察される。二著の内、2010年著作については、別のところで既述した（『フランス教育学会紀要』23号、121-124、2011年）。ここでは、二著作における優位性について、学んだところをいくつか記してみたい。

1) 「**当事史料と直接対面することによって**、当時の実像を知ろうとする立場を強固に持った」。これが著者あとがきにある基本姿勢で、セガンの生地、ヨンス県立古文書館はじめ、コレージュ学籍簿、国立図書館、パリ医療福祉古文書館、パリ市歴史博物館などを訪ね、第一級の当事諸史料を発掘させた。叙述は章立てごとに緻密で淀みない。各部巻末には、例証ともいえる原資料が翻訳付記されてい

¹ ふじい りきお

元北海道教育大学教授、元札幌三和福祉社会三和通所施設長

る。読み手には原資料で再構成できる。

a) 2010年著作：知的障害教育の開拓者セガン—孤立から社会化への探究 翻訳資料、子息の教育についてのO氏への助言(1839)。

b) 2014年著作：19世紀フランスにおける教育のための戦い—セガン、パリ・コミュニケーション。／第一部 白痴教育教師の誕生 原資料翻訳、白痴たちの治療と訓練の起源(1856)。／第二部 パリ・コミュニケーションと近代教育の構想 原資料翻訳、パリ・コミュニケーション下の子どもの状況 裁判調査資料より

2)「**創意くふうのある教育活動の発生**」これは、著者が1980年の著作『生活綴方研究』(白石書店)のなかで「教育実践の歴史性」について言及した一節である。創意あるところを跡付けるとすれば「当事史料」が重要となる。さらなる発展、それがパリ・コミュニケーションやセガンの研究へと向かわせ、「当事史料」を発掘させた。1986年の著作『教師像の探究—子どもと生きる教師像の創造』(教育史料出版会)とともに読んでいただくことをお勧めしたい。「特別支援における教師像の探求」。どう持つか。考えるところを胸に歴史と対話する。さすれば学ぶところが多いに違いない。

3)「**孤立**」から「**社会化**」へ。これは2010年著作の副題である。近代市民社会における障害児教育の開始をここに見いだしたことが、著者をして明解に諸関係を分析、叙述させたものと考えられる。アヴェロン野生児、ヴィクトールの教育可能性をめぐる、イタール(J.-M.-G. Itard)はピネル(P. Pinel)の見解に与せず、救済院ではなく、聾啞学校での実践を試みた。後継のエスキロール(E. Esquirol)は、1818年、知的障害を状態像と理解し、孤立状態にあると定義する。生来的な「孤立」は外界に立ち向かうことなく、市民として発達する可能性はないと理解する。しかし近代市民社会のなかでの「孤立」は、立ち向かう機会が保障されてのことで、教育なくして不可能とはいえない。乳幼児における可能性は、値踏みできるほど安価ではない。セガンは、1838年、イタールの導きのもとにこの課題に挑戦したのであった。

4) **どのように挑戦していったのか、セガン自身による整理**が、2014年版・第一部・原資料翻訳(1856年6月)として付記されている。アメリカに渡って6年、最初の実践から17年目の覚え書きである。訳文は、原文に忠実で、セガンの記述を日本語で読み取ることができる。残念ながらこれまでのセガン翻訳本にはなかったこと。なお、本論文は、コネチカット州・知能障害者実態調査委員会報告(1856年5月)にも掲載され、アメリカにおける知能障害児学校の開設運動に貢献した。1850年代以前と以降、そして現在、三面から翻訳文の行間を味わうことができる。

5) セガンは上記論文で、**当初たてた「哲学的原理」をとにかく実践的に削ぎ落とした**と記している。では、元になった哲学的原理とは何だったのか。「孤立」を抜け出す鍵概念でもあるので補足しておきたい。それは、対象児における「自我」と「非我」の関係で、当初は未熟。目で捉えたものが「非我」で、それをどうしたいのかが「自我」。面白そうだなとか、何だろうと思った時にはじめて「非我」となり、どうしたいのかが「自我」が育つとする。この意味で模倣が大事であり、対峙できる身体軸が

形成されなければならないとする。食欲の赴くままにしか行動できない子どもたち。日常の生活場面でどうしたいのか、行為を組織する実践こそが課題で、患者を何百人も診る仕事、医師が重要なのではない。教師こそが求められるとする。

6) 青年セガンにおいて、**知的障害児教育に携わる必然性**はどのように準備されていたのか。著者による実地踏査はこれへの接近を可能にさせた。1830年七月革命時、セガンは18歳で、王立特級コレージュ・サン＝ルイの数学特別進学クラスに在籍。成績も優秀。革命に功労があったとして、同年12月3日勅令により褒賞を授与。理数系の国家リーダー養成校の準備課程に在籍し、社会の矛盾には、演説でもって立ち上がることができる人物。そんな一面が調査されている。その後の経緯を含め、著書を読みたい。他方、ユゴー (Victor Hugo) は、この時28歳、市街戦に参加することはなかったが、同年9月から『ノートル＝ダム・ド・パリ』の執筆に集中したとのことである。興味深い。

7)ここで、挿絵を二つ。いずれもユゴー著。一つは『**レ・ミゼラブル**』**第三部・マリウスの口絵**。他は、『**ノートル＝ダム・ド・パリ**』**第4編1の挿絵**。前者は、パリにおける捨子記述の冒頭部。七月革命を描いたドラクロアの「民衆を率いる自由の女神」中央部を使用。右側の銃を持っている少年が「ガヴロッシュ」で、捨子。浮浪児の代表。後者は、作中・1467年のある朝、寺院玄関前に捨てられた乳児を教



会婦人部の人たちが見ている図。司教補佐・フロロにより「鐘突き」として養育。拾われた日にちなみ「カジモド」（復活節第二主日）と命名。ところで、1841年、セガンが救済院で対象とした知的障害児11名の内、少なくとも6名は孤児や捨子。「ガヴロッシュ」や「カジモド」には、その奥に、知的障害の子どもたちが存在していたのである。捨子の内、3分の2は、生後1ヶ月以内に死亡。知的障害児とは生命力を持った子どもということになる。

8)「**カジモドの眼**」。文芸作品における「**非我**」の抽出。著者は、ユゴーが8歳前後の時、住んでいた近くの庭園で、ゲラン夫人に連れられたアヴェロン人のヴィクトールと遭遇した可能性を推測し、その例証を試みている。前記の「カジモド」もその一例と言えよう。脊柱彎曲で、ゆがんだ顔の一つ目、聴覚も鐘音で障害。そんな彼が何を見、どう思い描いているのか。「カジモドの眼」を通じ、彼の「非我」を描出、文学作品とした。セガンが、託された子どもを前に、彼の「非我」を想定し行為を引き出す場面を設定しようとしたとしても、何の飛躍もない。1820年代、両眼視機能の解剖学が進み、後に斜視手術も準備。盲学校では生徒ブライユ (Louis Braille) が点字を開発。6点構成による蝕読方略を完成。子どもたちの眼が、何を見つけどう感じているのか。「非我」への想像が障害児教育創始の出発点であった。

9) **救済院での上司、医師ヴォアザン (Félix Voisin) との対立**は、てんかん児をめぐる問題だけではない。職業教育をも視野に入れたセガンにおける条件整備への要求が背景にあったものと考えられる。著者の実地調査による大発見。1848年二月革命時の「労働者権利クラブ」のアピールは、労働を通じての自己実現という課題も視野に入れられている。同年11月4日共和国憲法第13条では、無償義務教育と職業教育を結びつけ、労働を通じての自己実現も目指す規定となっている。これは社会権規定の最初の一つで、働けない場合は家族が養うことを前提に、救済される権利があるとする。セガンの取り組みが社会権規定に貢献していたことを示す一例であろう。ただし、整備の任にあった人たちや、推進すべきヴォアザンたち医学界は、「教育」を目指すよりも、まずは救済さえできればよいとする立場であった。セガンからすれば、救済という名の障害の「固疾」が進行するのであった。

10) **最後に、2014年著作・第二部について**。前記・「カジモド」は中世後期の作中人物であった。彼はフロロにより生命を得たが、教会の中での閉じられた生活であった。近代公教育における「世俗性」は、摂理を離れ、市民として労働者としての教養を形成することを原則とする。ところが、無償制や義務制に比べ後回しで、1850年ファロウ法 (Loi Falloux) でも、「教育の自由」の名のもと宗教者の教育介入が合理化されるのであった。これに対し、ユゴーは立法議会で反対演説する。児童労働に加え、科学から遠ざけられている子どもたちの悲惨を憂え、「教育への権利」を主張する。権力の中枢にいたティエール (Adolphe Thiers) との確執も興味深い。その後どのように展開され、1871年のパリ・コミュンではどのような人たちが立ち上がったのか、その実相が解明される。著書を読みたい。巻末の「研究のための史料素描」、原資料翻訳、立ち上がった浮浪児たちの「裁判記録」は、これまでの理解を書き改めてくれるであろう。

~~~~~

《補：川口から藤井への書簡より》

2012年10月に行われたセガン生誕200周年記念シンポジウムでの評価：

「ムッシュ川口によって新しく確信できるセガンの数ページが開かれた。」

「セガンがオセールの祖母の家に寄留していたこと、これは当時の里子・里親システムとかかわっての考察と史料発掘から間違いのないことだと評価できる。その家も特定されている。オセールのコレージュでの学びの姿を今一度検証しなおす必要もあるかもしれない。」

「セガンが共和主義者であったと言われてきたが確証出来る史料はこれまでなかった。ムッシュ川口は労働者の権利クラブのポスターを発掘している。これによってセガンが共和主義者であったと確かに評価できる」

「このポスターがセガンの白痴教育の目指す道を示しているとムッシュは評価しているが、肯定的に検証する必要ができた。」